

## 後撰和歌集注釈(八)

— 卷四夏(二六〇) — 一六六 —

工 藤 重 矩

(平成七年九月八日受理)

藤原のかつみの命婦にすみ侍けるおとこ、人の手にうつり侍にける又のとし、かきつはたにつけてかつみにつかはしける

良岑義方朝臣

160

いひそめし昔のやどの杜若色許こそかたみなりけれ

藤原のかつみの命婦に通い棲んでいた男が、女が他の男の手に移ってしまったその翌年、杜若に付けて、かつみの命婦に遣わしたうた

初めてふたりが言い交した、昔のあの家杜若は今年もまた咲いたけれど、思えばこの杜若の色だけが二人の思い出のよすがだったのだなあ。

『古今六帖』第六かきつはた(三七九九)に第二句「むかしの人の」として採られている。作者は不記。

詞書、作者が詞書中に男として出てきていて、視点が統一されていない。二荒山本も「藤原のかつみにすみ侍けるおとこ、人の手にうつり侍

ける又のとし、かきつはたにつけてつかはしける 義方朝臣」と小異はあるが、趣旨は同じである。例によって『つかね緒』は、「藤原のかつみの命婦にすみ侍けるに、人の手にうつり侍にける又のとし、かきつはたにつけてつかはしける」と改訂している。

これらに拠れば、人の手に移ったのは女である。詞書のみで見れば、男が他の女に移ったとも解し得るが、歌詞に「昔の宿の杜若」とあるから、義方が贈った杜若は命婦の居た家のそれである。命婦がもとのままの家に居て、義方が別の女のもとに移ったとすれば、義方が「昔の宿」即ち命婦の家の杜若を贈るのは不自然である。したがって、この詞書は親切な書き方とは言い難いが、移ったのは女だと理解しなければならぬ。雲州本はこの部分を「すみ侍けるを、こと人のてに」としている。

『標注』は「こゝの詞がきのまゝにてはきこえず。思ふに、命婦にすみけるをこと人のとありしを、あやまれるか。命婦のこと人のてにうつりしなるべし」と、雲州本と同じかたちを推定している。たしかに、「をこと」が「をとこ」と誤られる可能性はありうるであろう。なお、木船『全釈』片桐『新古典大系』は、「……をとこ」は「つかはしける」に

係ると、主述関係を説明している。

天理本は「ふちはらのかつみ命婦にすみ侍けるおとこの人にうつり侍にける又のとし、かきつはたにつけてつかはしける よしみねのよししかたの朝臣」とあって、主格の「の」が存する。「男の」と「の」が存する本文としては、他に堀河本・中院本がある。承保三年奥書本も「おとこの人にうつり」云々とある。思うに、「命婦にすみ侍けるおとこの人の手にうつり侍にける」云々は、この部分のみでの自然な文脈としては、男が人の手に移ると読むべきであろうから、主格の「の」を補入したという事情であろう。

さてまた片仮名本では「藤原カツミノ命婦ニスミハベリケルヲ、命婦ハコノヤストケガモトニマカリニケリ、マタノトシ、カキツハタニツケテツカハシケル、カツミガモトニ 良峯良孝朝臣」とあり、歌の第五句が「カハラザリケレ」となっている。詞書、「ツカハシケル、カツミガモトニ」と語順が逆転しているのは、あるいは本文には「カツミガモトニ」がなく、書き入れであったものが、位置がずれたまま本文文化されたのかもしれない。傍線の部分は、まったく独自の本文である。ほかに傍証はないが、これを信ずれば、命婦は我が子の許に移ったのであるから、他の男の許に去ったのではない。旧居を離れた事情ははっきりしない。何らかの経済的事情で子の許に移ったのかもしれない。もとより、義方の心も離れ方で、その宿移りがそのまま男との別離でもあったのである。もしそうだとすれば、義方がこの歌を贈ったのは、別れたもとの女への一種の挨拶ということになる。

片仮名本と底本等と何れが本来のかたちであるのか、いま決定すべき手段を持たない。片仮名本にしたがえば、義方と命婦との関係のみであるが、底本であれば、他の男への心変りを恨んだ、いわゆる三角関係の

趣となる。このあたりが後撰和歌集本文処理の難しさである。

「人の手にうつる」という言い方、本集一二一五に、女が「こと人に迎へ」られたと聞いて詠んだ男の歌に「我がためにをきにくかりしはし鷹の人の手にありと聞くはまことか」とある。女をはし鷹（鵠）に譬えて、その縁語として「人の手にあり」と言うのだが、順序としてはもともと女が他の男に添うのを人の手にありと言うことから、女を鵠に比喩したのである。一三一二の「君が手をかれゆく」も同じである。

「かきつはた」は『倭名抄』に「蘇敬本草注云、劇草一名馬蘭、和名加木豆波太」とある。『名義抄』では劇草・馬蘭・杜若がカキツハタと訓まれている。ハに濁点は打たれていない。『万葉集』では垣幡・垣津旗・加伎都播多と書かれている。平安時代あたりまではカキツハタと清音であったようだが、『日葡辞書』では既に *Caicubata* と濁音になっている。水辺に生じて紫の花を咲かせる。『枕草子』八四段（めでたきもの）には、「花も糸も紙もすべて何も何も紫なるものはめでたくこそあれ、紫の花のなかには、かきつはたぞすこしにくき」とある。

歌意、季吟『抄』は「昔、いひそめし宿も今はこと人の手にうつりかはりたれば、此の杜若の色ばかりこそ形見とみれと也。猶昔を忘れず、なつかしき心をよめるなるべし」という。傍線部分、宿その物が人手に移ったと解しているようにもみえるが、他の男が命婦の家に通い住むようになったと解し、それを人の手に移り変ると言ったのであろう。『新抄』は「此杜若のみこそ、昔我が通ひすみたる時のかたみにて、ゆかりともいふべき色なれ、其他の事は、すべて昔にも似ずなりぬる事よといふ意にて、杜若の色ばかりこそと、上下の句の間に文字を入れて聞く意なるべくは思はるれど、猶いさゝか心得がたきふしもあり、そは詞書と合せて見るに、二ノ句、昔の宿といへるは、即かつみの命婦の家の事

にて、其家に咲てある杜若を折て、今かつみの居る禁中の局などにやりたるならんか、さらでは、二ノ句の宿といへる事心得がたし、六帖には昔の人のとあれども、さてはいよいよよろしかるべくも思はれず、又、初ノ句、いひそめしといふ詞もいさゝかたしかならぬこゝちす、詞書ことたらぬにやあらん、なほよく考ふべきなり」と、基本の解釈は同じだが、「昔の宿」が誰の家で、命婦がいま何処にいるかに拘っている。

この問題は詞書の片仮名本との違いにも通じることである。片仮名本の本文であれば、命婦は別の家に移っているから『新抄』のような疑問は生じない。底本等の本文からたちには命婦は家を移ったと解し得るわけではないが、命婦がそのまま元の家に居たとすると、その家の杜若を「昔の宿の杜若」と言うのはやや穏やかではない。作者義方にとっては昔の宿だと解することも可能ではあるが、片仮名本のように女も家を去っている状況の方がふさわしい。とすれば、『新抄』のいうように、今かつみの命婦は家を離れて禁中の局などに居ると考えるのも一案である。あるいは、新しい男の用意した家に居るとも考えられる。いずれにしても、いま女はその家に居ないという状況であろう。『伊勢物語』四段と類似の趣きである。『新古典大系』は天福本本文のままで「かつみが別の男の所に引き取られたのであらう」と解している。

なお、「昔」は遠い過去だけではなく、数か月でもそう言う。ここでは去年の事だから昔と言ったのだが、物理的時間のみならず、心理的に遙か過去の事になってしまったという思いをこめていたのであらう。

さて、義方はなぜ命婦に杜若を贈ったのだろうか。杜若の象徴するものは何か。『万葉集』には恋人を杜若に譬える歌が数首(一三四五・一三六一・一九八六・二五二一・三八〇一など)があるが、そのうち

我のみやかく恋ひすらんかきつはたにつらふ(にはへる一六帖) 妹

はいかにかあるらん(一九八六、六帖三八〇〇)

かきつはたにはへる妹をゆくりなく(いきなみに一六帖) 思ひいでつつ嘆きけるかも(二五二一、六帖三八〇一)

は、『古今六帖』かきつはたの項にも採られている。義方が杜若に託した心情は、我のみ恋う、妹はいかにかあるらん、思ひ出でつつ嘆く、という類のことではなからうか。また、かきつはたは垣の語を含む故に、「君が宿我が宿わけけるかきつはた(貫之集八二二)のような修辭としても用いられる。ここでも二人を隔てる垣のイメージがあるであらう。

修辭、「いひそめ(初めに染めを掛ける)」「かたみ(形見に衣の片身を掛ける)」は「色」の縁語。杜若は染色に用いるから、その縁で構成した。言ひ染めた、その色だけが形見という理。「色ばかりこそ」は、染めた人は居ないとの含意。

夏なかに秋を知らするもみぢ葉は色ばかりこそ変らざりけれ

(貫之集八七九)

は下句が類似する。ことに片仮名本と一致する。

いひそめし池のみづき絶ゆれども深き心は忘れざりけれ

(元真集二九五)

は、初句が同一で(ただしこちらは「言ひ」に「井樋(↓七九二)」を掛けている)言わんとする趣きも類似する。

尋ねこしあさかの沼のかきつばた色ばかりこそ深く見えけれ

(拾玉集一二二三)

はこの歌の本歌取り。

心とめしかたみの色もあはれなり人はふりにし宿のもみぢ葉

(風雅集雑下二〇三〇伏見院御製)

はかすかに影響があるかもしれない。

加茂祭の物見侍ける女のくるまにいひいれて侍ける

よみ人しらず

161 ゆきかへるやそうぢ人の玉かつらかけてぞたのむ葵てふ名を

賀茂の祭の見物をしていました女の車に言い送りましたうた

往き還る多くの人が蔓として掛けている葵あひの、そのあふひ（逢ふ日）という名を、心にふかく念じてあてにしています。

詞書、片仮名本「四月カモノマツリニモノミル女車ニイヒイレ侍リケル」二荒山本「かものまつりみはべりけるをんなぐるまに」など小異あるが、言うところは同じ。

賀茂祭は四月中の酉の下賀茂・上賀茂両杜で行なわれる。その前の午の日に、鴨川で斎王の禊がある。禊の有様は『儀式』『西宮記』『江次第』をはじめ諸故実書日記に記事がみえるが、この時の斎王および供奉の者の行列もはなやかな見物であり、『源氏物語』葵巻における例の葵上と六条御息所との車争いは御禊の折の出来事である。祭の当日には斎王が両杜に入り、奉幣の勅使が立てられる。この日も京をあげての見物となる。公卿をはじめ男達も見物に出ること、『小右記』等に記事がある。『源氏物語』葵巻で、光源氏は紫と同車してこれを見物している。翌日、斎王は斎院に還る。還立あるいは祭のかへさと言ひ、これもまた大きな見物である。『枕草子』二〇八段に「見物は、臨時の祭、行幸、祭のかへさ、御賀茂詣」とあり、一条大路での見物の様子が描かれて、二九段（心ゆくもの）三八段（鳥は）二二三段（よろづのことよりも）等

にも記事がある。

このように作者が見物に出た日は、御禊の日、祭の日、還立の日とそれぞれ可能性がある。この和歌のやりとりがどの日に行なわれたかを考えてみると、「ゆきかへる八十氏人」とあること、女の返歌に「禊にぞせし」と禊を過去の事として答えていること等から、奉幣使の立つ祭の当日と考えるのが穩当であろう。そもそも詞書に「賀茂祭」とのみあるのも、祭当日をいうと理解すべき書き方なのである。『源氏物語』葵巻の祭当日の見物の条に源内侍と光源氏との贈答があるが、それは

（源内侍）

かざしける心ぞあだに思ほゆる八十氏人になべてあふひを

（光源氏）

とある。これは『後撰和歌集』をふまえているであろうが、これを祭の日の歌として用いたのは、『後撰和歌集』の歌自体が祭の日の歌であったからであろう。

歌意は口語訳のごとくであり、諸注にも大きなゆれはない。『抄』は「僻案抄云、八十氏人也、世にある多くの人と云心也。葵かつらをかくる事に、逢日といふ名を懸て、頼むといひかけてよめり。この上句、序歌ながら其日の風情をよめるにや」と。『新抄』は「三ノ句までは、かけてといはん料の序に、其日の物を以ていへるなり。趣意は、葵を逢日にとりなして、逢といふ名を、心にかけてたのむとなり。やそ氏は、天皇に仕へ奉る、氏々の多くの人をいふ。〔詔詞などに、八十伴雄とあるもおなじ〕をもとにて、ただ世ノ中の多くの人といふ意にもいへるなり。〔冠辞考、ものゝふのやそ氏人の条に委く見えたり。〕この歌などに遣ひたるは、今日賀茂御杜に詣とて行かへる多くの人といふ意なり。玉

かつらは、今日人々の頭に懸る葵桂の鬘をいふなり。「玉かつら、花かつらなどの事、委くは下雑四にいふを見て心得べし。」四ノ句のかけてといふ詞は、心にかくるにも、口のはにかくるにも、趣意をば軽くも重くも、いと広く遣ふ詞にて、集中にもいと多く見えたれば、此所に別に例などは引きいず」と詳しく説明している。なお、『抄』に引用する『僻案抄』の全体は「やそうち人は、八十氏人とかけり。世にある多くの人といふ心なり。ふるくはかくよめるを、これにつきて、宇治河をやそうぢ河とよむに、又つきて近代、宇治の里人を、やそうち人とよめる歌おほかり」(歌学大系本)とある。

「八十氏人」の用例は、『万葉集』には二例(一〇二二・四一〇〇)あり、八代集では『拾遺集』に二例(五七四・五七七)、『後拾遺集』に一例(四五二)ある。「世ノ中の多くの人」という意ではあるが、

もののふのやそ氏人も吉野川たゆることなく仕へつつ見む

(万葉四一〇〇)

に顯著にうかがわれるように、たんに多くの人というのではなく、諸々の官人をいう語のようである。「ゆきかへる八十氏人」は、祭に斎王に供奉する諸官人や奉幣使一行をいうが、いま現に目前に行つたり還つたりしているのではない。賀茂杜に行きそして還るのでこう言つた。和歌のやりとりは、おそらく行列を待つ間になされたものであらう。

第三句の玉かつらまでが当日の景による序である。賀茂祭には賀茂杜はもとより見物の車にまで葵あるいは葵桂を懸けるが、供奉等の官人が桂と葵の挿頭をつけること、延喜時代の惟宗公方の撰述になる『本朝月令』の賀茂祭事の項に「鴨祭之日、楓山之葵挿頭、当日早朝、松尾杜司等令資挿頭料、参候内蔵寮、祭使既来、置楓山葵於庭中、詔戸申使等、各挿頭出立」とあり、『小右記』の治安三年(一〇二三)四月十八日条

にも「於内蔵寮請桂葵、使少将陪從等同挿頭多」とある。『古今集』物名(四三三・四三四)に「あふひかつら」として

かくはかりあふひのまれになる人をいかかつらしと思はさるへき  
人目ゆゑ後にあふひのはるけくはわかつらさにや思ひなされむ

とあるのは、賀茂祭のそれを詠んだものであらう。「八十氏人の玉かつら」はこの挿頭のことである。「かつら(鬘)」には、あるいは「桂」を響かせているかもしれない。なお、楓と桂、『倭名抄』にはそれぞれ和名をヲカツラ、メカツラとする。おなじく葵は「本草云、葵(音達、和名阿布比)味甘寒無毒者也」とある。

玉鬘の縁で、「かけてぞ頼む」と続くのだが、「かけて」は『新抄』に注意することく、心に思うの意と、言葉に出すの意とがある。本集の

唐衣かけて頼まぬ時ぞなき人のつまとは思ふものから(七四六)

と同じ言い回しであることを考えると、この場合は、心に思うの意と解するのがよいであらう。なお、「かけて」の語の用法については、工藤博子「古今集五番歌『春かけて』の解釈」(『香椎潟』三八号、平成五年三月)が備わる。

「葵」に「逢ふ日」を掛ける歌は、『貫之集』一三〇、『敦忠集』八八・八九、『重之集』二四三の他にも多いが、その掛詞を用い得る故であらうか、賀茂祭にこの掛詞で男女の間に歌をやりとりする事がしばしば見られる。

しらねどもかつらわたりとさくからに賀茂の祭のあふひとにせむ

(元良親王集九五、賀茂の祭の日、かつらの宮の御車にたてまつりたまひける)

神かけて君がちかひしわがなかのあふひはよそにならんとや見し  
(兼澄集一三六、忘れ侍りしをんな、四月祭の日、車より葵

をおこせて侍りしかば)

の他、『和泉式部集』四五五、『同統集』二九九など。『後撰集』一六一の場合も、葵にちなんでの戯れの言い掛けであろう。

本歌取り。

ゆふだすきかけてぞ頼む玉かづらあふひうれしきみあれと思へば

(夫木集夏二五二〇、賀茂祭、家房)

は、本歌と「ちはやふる賀茂の社のゆふだすきひとひも君をかけぬ日はなし(古今集恋一・四八七読人不知)」を取り合せた趣きである。また『温故抄』は次の歌を指摘する。

けふは又やそ宇治人のもろかづらかけてまたるゝ郭公かな

(西園寺三十首夏、家隆卿)

返し

162 ゆふだすきかけてもいふなあだ人の葵てふなはみそぎにぞせし

そのような事を口に出して言つてはなりません。今日の「あふひ」は浮気な人が逢ふ日という評判ですので、その「あふひ」ということばは、私は褌にして流してしまいました。

木綿<sup>うす</sup>だすきは「かけ」の枕詞。「ゆふ」は『倭名抄』祭祀具に「本草注云、木綿(和名由布)折之多白絲者也」とある。ゆふは綿糸ではなくて、『豊後風土記』速見郡の項に「此郷之中、拷樹多生、常取拷皮、以造木綿、因曰柚富郷」とあること等を以て、コウソの皮の繊維をさらしたものだといわれる(時代別国語大辞典上代編)。神事に肩や袖に懸ける

ことは、「木綿<sup>うす</sup>手次<sup>たす</sup>かひなに懸けて(万葉集四二〇)」「木綿手次肩に取り懸け(三二八八・四二三六)」等に見える。この歌の場合は『新抄』に「初ノ句木綿<sup>うす</sup>は、枕詞ながら、其をりによし有物を以て冠らせたるなり」とあるごとく、賀茂祭にちなんでのことであり、かつまた

ちはやふる賀茂の社のゆふだすきひとひも君をかけぬ日はなし

(古今集恋一・四八七)

による措辞でもある。

歌意、『抄』に「化なる人の逢日といふ名は、御褌にはらへすてたれば、かけてもいひそと也」と、『新抄』に我はあだくしき人に逢ふといふ事は御褌にはらひすてつれば、今はあふひなどいふ事は口のはにかけてもいひ給ふとなり。末ノ句には、古今恋一「恋せじとみたらし川にせしみそぎ神はうけずぞなりにけらしも、とある歌の意もあるべしと、わが友古道いへり」とある。なお説明を補えば、「あだ人のあふひてふなは」云々は、今日は葵にことよせて誠意のない浮気な人が逢う日という評判ですが、あなたと違って私には葵(あふひ)の日だから逢ふ日だと思ふような浮ついた気持はありません、との意である。「あだ人のあふひてふな」は、一般的にそう言われているということ。それがおのずから相手の男に「あなたはあだ人だ」と言う働きをしている。

「みそぎにぞせし」は前々日の斎王の御褌にかけて、「あふひ」という言葉は褌が流したと言った。「せし」は「せじ」の可能性もあるが、褌はけがれを濯い流すものであるから、「せし」で解するのが穏当である。『新抄』は「恋ひせじと」の歌を挙げているが、全体の歌意は言わんとしていることと反対だから、全体を踏まえているとは言えない。しかし、「恋せじとみたらし川にせしみそぎ」の部分を意識してはいるであらう。そして、このやりとり自体が戯れであるとすれば、男が「神は

うけずぞなりにけらしも」を踏まえて再び詠み掛けてくる余地を、技巧として作っているのだとも解しうるかもしれない。

### 題しらず

163 このごろはさみだれちかみ郭公思みだれてなかね日ぞなき

このごろは五月雨が近いので、ほととぎすは思い乱れて、はげしく鳴かない日はない。

二荒山本は下句が次歌の下句と同じ。目移りによる誤り。雲州本、二句「さみだれしげみ」。『貫之集』六六一、歌詞おなじ。

五月雨の中で郭公が鳴くと詠む例、

五月雨にも思ひをればほととぎす夜深く鳴きていつち行くらむ

(古今集夏一五三紀友則)

五月雨の空もとどろにほととぎす何をうしとか夜ただ鳴くらむ

(古今集夏一六〇紀貫之)

など。さみだれ(五月雨)は乱れを掛けて用いられることがしばしばある。『古今集』一五三はその例。本集一六六(さみだれに春の宮人くるときは)一八二(さみだれにながめくらせる月なれば)も同じ。本歌も「思ひ乱れて」と響きあっている。

注釈書では、ホトトギスそのものを詠んでいるのか、人のことを寓しているのかが問題にされている。『抄』は「此歌、恋歌と郭公の歌と両義有り。恋の歌ときけば、上句、序歌也。只ほととぎすの歌なれば、思ひみだれても、子規のしきりなくを、思ひみだれてと云也。但恋の歌に

て可然にや。此集は恋歌多しと知べし」と、両解をあげて、此の集は恋歌が多いという理由で、恋の歌と解する方向に傾いている。『新抄』は「五月雨は思ひ乱てといはん料に其時の物を以ていひ、郭公は、なくといはん料の序なり。此歌、貫之集の恋ノ部に入たる歌にて、げに恋の意にて、六帖(九〇、躬恒)に「五月雨に乱れそめにし我なれば人をこひぢにぬれぬ日ぞなき、とあるなどの類とおぼし。猶思ふに、初二ノ句のさまは、五月雨の中には男女の逢ふ事を忌むといふ諺によりていへるにもあらんか。もし然れば、二ノ句は、思ひ乱てといはん料のみにあらず、用ある詞なり」と、『貫之集』での配列、類似の歌を以て、恋の歌と解している。近年では、木船『全釈』は、ほととぎすが思い悩んで鳴くのだと解し、片桐『新古典大系』は、下句をほととぎすよりも人の心情表現にふさわしいとして、ほととぎすも私と同じく思い乱れて云々と解している。工藤『和泉叢書』では、ほととぎすが恋をしているととりなした歌だと解した。

題しらずの歌であるから、どのような状況で詠まれた歌かがわからないので、ほととぎすそのものを詠んだのか、ほととぎすに託して人の心情を詠んだのか、明確にはしがたい。ただ、言葉の上では、明らかにほととぎすの事として詠まれている。例えば、

数ならぬわがみやまべのほととぎす木の葉がくれの声はきこゆや

(本集一七九、五月ばかりに物言ふ女につかはしける)

うちはへて音をなきくらす空蟬のむなしき恋もわれはするかな

(本集一九二)

わがごとく物や悲しきぎりぎりす草のやどりに声たえず鳴く

(本集二五八)

は、我が思いを鳥虫に託した同化しているのだが、これ等とは明らかに

に表現がことなる。一方では

旅寝して妻こひすらしほととぎす神なび山にさよふけて鳴く

(本集一八七詠人不知)

はほととぎすがその妻を恋うて鳴くの意で、ほととぎすを擬人化しての詠もある。したがって、ここ一六三でも、ほととぎすが鳴くべき五月の五月雨の季節も近付いて頻りにほととぎすが鳴いているのを、思い乱れて(おそらく恋の思いに)鳴くと擬人化したと解して不都合はない。もとより原場面ではどのようなであつたかは確言できないが。

末句に「なかぬ日ぞなき」と置く例、

春深きみ山桜も散りぬればよをうくひすのなかぬ日ぞなき

(続古今集哀傷一三九三延喜御製)

秋風のうち吹くごとに高砂のをのへの鹿のなかぬ日ぞなき

(拾遺集秋一九一詠人不知)

住の江のまつほど久になりぬれば葦鶴のねになかぬ日はなし

(古今集恋五・七七九兼覽王)

など。なお、延喜御製と兼覽王の歌は人が泣き、拾遺集のは鹿が鳴くのであろう。

本歌取り。

我がいはは小倉の山の近ければうき世をしかなかぬ日ぞなき

(新勅撰集秋下三〇六八条院高倉)

きりぎりすながきうらみを菅の根の思ひ乱れてなかぬ夜ぞなき

(続後撰集秋中三八五藤原知家)

このごろは御船の山に立つ鹿の声をほにあげてなかぬ日ぞなき

(続後拾遺集秋上三〇三源俊賴)

164 まつ人は誰ならなくにほととぎす思ひの外になかばうからん

私が待っているのは他の誰でもないおまえなのに、ほととぎすよ、心外なことに、もし他所で鳴くならば、私はつらいと感じるだろうなあ。

『平安朝歌合大成』によれば、延喜十三年三月十三日亭子院歌合廿巻本に第二句「つねならなくに」として、同廿巻本別本断簡に本集とおなじ形で見える。

歌意は、『抄』に「我こそ待つに、我方ならで思ひの外の所になかばうからんと也」とあり、『新抄』も「げに此意なるべし」と、これに同じている。木船『全釈』片桐『新古典大系』も同じ。ただし、木船は一六五番の補説で、男をほととぎすにたとえ、わたくしはあなたのおいでをひたすらお待ちしていますのに云々という一解をも示している。工藤『和泉叢書』は、上句を「私が待っているのは誰でもない、あなたなのに」と解した。この他に、彰考館蔵『後撰集抄』(国文学研究資料館の写真による)が、「待人はたれにてもなし、時鳥にてこそあるに、よそになかばうからん也、思の外にはよそに也」とある。「誰ならなくに」を「他の誰でもないこの私なのに」と解するか、「他の誰でもないあなたなのに」と解するかの違いである。語法的にはどちらも成り立つ解釈なので、やや詳しく検討してみよう。

『新抄』は「誰ならなくに」の語法に詳しい説明を付けているので、まづそれを掲げる。「此歌などのてにをは、玉緒四の巻三十八葉四十二葉、二所に、一つの何、此格、結にかゝはらずとて、古今十四「みちの



くの忍ぶもぢずり誰ゆゑに乱んと思ふ我ならなくに、同「津の国のなには思はず山城のとはに逢見ん事をのみこそ、万葉八「いづくには鳴きもしにけん時鳥わぎへの里にけふのみぞなく、古今十二「こひしなばたが名はたゞじ世の中の常なき物といひはなすとも、又右の「まつ人はたれならなくに云々の歌などを出されて云、此格は、そのさしていふ物に對へて、それならぬ他の物を何といふなり、古今十四の歌は、思ふ人に對へて、其他の人をたれといへり。君をおきて他の人故にみだれんと思ふわれならなくになり、「いづくには鳴きもしにけんは、他の所には鳴きもしにけんなり、万葉には猶多しなど、委くいはれたり。かゝれば此歌なるも、待人は我なり。他の人にてはあらず。然るを他の所になかば云々と云ふなり。」

『詞の玉緒』(本居宣長)の説明の要点は「そのさしていふ物に對へて、それならぬ他の物を何(誰)といふなり」である。この点には何の異論もないのであるが、「待つ人は」の歌において直ちに「待人は我なり」となるかどうか。「誰ゆゑに乱んと思ふ我ならなくに」の場合も、他の誰でもないあなた故にの意である。「恋ひ死なば誰が名は立たじ」もまたあなたの噂が立つの意である。一方で、

ここのかさねの その中に いつきすゑしも 言でしも 誰ならなくに 小山田を 人にまかせて (拾遺集雑下五七四藤原兼家)

は、ほかでもない私の意である。「ただし、その本歌である古今六帖九六五「ことでは誰ならなくに小山田の苗代水の中淀みする」更にそのもとの万葉集七七六「ことでは誰が言なるか小山田の苗代水の中淀にして」は共に、言い出したのはあなたの意。いま拾遺集の解釈は岩波新古典大系に拠った。」したがって、「誰」が相手を指すか自分を指すかは、その文脈によって決まる。

その文脈をなすいまひとつの要素が「まつ人は」である。これも諸解のように、人がホトトギスを待つていると考えて待に疑問は起こらないごとくだが、実はそれはさほど当然の解釈でもない。「待つ人」の例をあげる。

宿ちかく梅の花うゑあぢきなく待つ人の香にあやまたれけり (古今集春上三四詠人不知)

待つ人もこぬもの故に鶯の鳴きつる花を折りてけるかな (古今集春下一〇〇詠人不知)

待つ人にあらぬものから初雁のけさ鳴く声のめづらしきかな (古今集秋上二〇六在原元方)

ともにこそ花をも見めと待つ人の来ぬもの故に惜しき春かな (後撰集春下一三六藤原雅正)

待つ人の来むや来じやの (後撰集恋六・一〇六二詠人不知)

待つ人は来ぬときけども (後撰集雑四・一三〇三詠人不知)

池水のそこにあらではねぬなはのくる人もなし待つ人もなし (拾遺集雑恋一二二明日香采女)

日暮るれば待つ人も来ぬ (拾遺集一三五六和泉式部)

など、三代集での用例はみな待つている対象の意である。『金葉集』四五三『詞花集』一五八『新古今集』一六〇七も同じ用法。『万葉集』は一例(二六七二、君をおきては待つ人もなし)のみだが、やはり待つ対象を言う。

待つている立場からの用例としては、

待つ人の宿をばしらでほととぎすをちの山辺を鳴きてすぐなり (金葉集夏一一七二条関白家筑前)

ほととぎす尋ぬるだにもあるものを待つ人いかで声を聞くらむ

(金葉集夏一二五詠人不知)  
待つ人はぬる夜もなきをほととぎす鳴くねは夢のこちこそすれ

(詞花集夏六一藤原公教)

などあり、他にも『後拾遺集』七二七『千載集』一五一『新古今集』六七二・一八三九がある。この用法で注意されることはホトトギスに関連した用例が多いことである。その点では『後撰集』一六四の用法を「ホトトギスを待っている人」と解する援けにはなるが、三代集時代は待っている対象をいう用法はるかに優勢である。私家集を見渡しても同様の傾向であるが、十世紀後半の藤原元真(元真集八)の

待つ人はあまたあれども立ちとまり山ほととぎす二声と鳴け

あたりが後者の用法の早い頃の例であろうか。

歌語としての「待つ人」はもともと、待っている対象である人、待つ相手という言葉であったものが、自他の曖昧さの故に、待っている当の人、待っている側の人をいう用法をも生じてしまったのではなからうか。ホトトギスとの関連で後者の例が多く見えるのは、あるいは『後撰集』のこの歌が後代の歌人にそのように解釈された結果であるのかもしれない。とはいえ、後撰和歌集時代にあつては、待っている対象である人、待つ相手を言うと考えるのが穏やかであるし、

待つ人にあらぬものから初雁のけさ鳴く声のめづらしきかな

(古今集秋上二〇六在原元方)

のように、雁を擬人化して詠む歌もあるから、ここではホトトギスを擬人化して、私が待っているのは他の誰でもないあなたなのに、ほととぎすよ、と解しておく。待っているのは私だという解釈も、なお捨てがたくは思われるのだが。

「思ひのほか」は、心外にもの意に、余所での意を掛ける。意外・

心外の例、

我が宿の梅の立ち枝や見えつらむ思ひのほか君がきませる

(拾遺集春一五平兼盛)

同様の掛詞の例、

家の風ふくともなしに言の葉の思ひのほかにかで散るらむ

(続詞花集雜上七四七参河)

165 にほひつゝちりにし花ぞおもほゆる夏は緑の葉のみしげれば

きれいに咲いては散っていった花が思い出されることだ。夏には緑の葉ばかりが繁るので。

二荒山本・片仮名本・雲州本・堀河本は第五句「はのみしげりて」とあり、『寛平御時后宮歌合』四二(歌合大成五番)及び『新撰万葉集』二九一もそれに同じ。二荒山本は第四句「なつのみどりは」とする。

初句の「にほひつゝ」は「緑の葉のみしげれば」との対比からして、嗅覚の匂うではなく、視覚のそれである。「つつ」は、咲いては散り咲いては散りしたことをいうであろう。木船『全釈』は「美しく照り映えながら散ってしまったさくらの花が」と、片桐『新古典大系』は「美しく咲きながら散ってしまった花が」と現代語訳しているが、「にほふ」と「ちる」とが同時に平行して在る、即ち、かがやきながら散ったというのではあるまい。また、『全釈』は「にほひつつ散る」のが桜がもつともふさわしいとして、この花を桜と解している。下句の葉が繁るという事からは、草花でなく木の花であると理解されるが、花を桜と限定す

必然性もないので、ここでは木の花全般をいうものと理解したい。

歌の構文、二三句に「ぞ思ほゆる」と置く例、本集三七五・五七五にも見える。

うらみぬも疑はしくぞ思ほゆる頼む心のなきかと思へば

(拾遺集恋五・九八一詠人不知)

も類似の構文。

この歌は、夏になって緑の葉ばかりになった木々を見ながら春の花を思い浮べている歌であることは明らかであるが、『新抄』は何か寓意があるのではないかと疑っている。すなわち、「抄に、心は明らかなり、青葉につけて、猶花をしたふ意なりとあるが如くなるべし。此歌、何とかやゆあありげにも聞ゆれば、玉葉雜四(二三〇九)に、後朱雀院の御ことをおぼしめしなげきて、白川殿におはしましけるころ、四月ばかりに、御前の花は散はてゝ、青葉なる梢を御覧じて 上東門院」をしまれし梢の花はちりはてゝいとふ緑の葉のみ残れる、とあるなどの類にやとも思へど、なほ菅家万葉集下巻にも夏部に載せ給ひて「此下巻の詩は、後人のわざなるべきよしは、人々の説ありて、げに然るべくは見ゆれど、又、中にいさゝかは、とり用ふべきふしなきにしもあらず」、朱明稍来春花薄、青陽暮行公鳥忽、妬淚嫉声霑襖袖、細雨輕風不起塵、と云を添へられたれば、抄の説の如く、夏になりて、花をしたふ意なるべし」と。上東門院の歌は『標注』にも指摘されており、本歌取りと言えるが、それ故に『新抄』は類似の状況を想定できるのではないかと疑っているのである。しかし結局は、『新撰万葉集』の配列などを考慮して単なる季節の歌という理解に落ち着いている。

もしこの歌が『寛平御時后宮歌合』のために作られたのであるなら、やはり寓意は想定できない。その点では、木船『全釈』が、女を花にた

とえての、他に心を移した女をうらむ歌という一解を行なって、「一六三」一六五番三首の題詠人不知歌は、かく、一組の男女の贈答とも享受できる」というのは、ひとつの作品としての歌集をどう読むかという観点からの試みではあるが、深読みというべきであろう。

朱雀院の春宮におはしましける時、たちはきら、さ月許  
御書所にまかりて、さけなどたうべて、これかれうたよ  
みけるに  
大春日師範

166 さみだれに春の宮人くる時は郭公をやうぐひすにせん

朱雀院の帝がまだ東宮であらせられました時、帯刀達が五月の頃に御書所に参って、酒などをいただいて、これかれの者が歌を詠んだ折に

この五月雨時に、こんなに乱れて春宮の宮人が来る時には、夏のほととぎすを春の鶯と言うかもしれないなあ。

『古今六帖』五月(九一)に入集、作者おほかすがのもののり。

詞書は諸本により小異あるが、詠歌事情を左右するほどではない。二荒山本「朱雀院東宮にておはしましける時、たちはきとも五月はかりにこそこのころにまかりて、さけなとたうへはへりて、かれこれうたよみはへりけるに おほかすかのものり」片仮名本「朱雀院春宮ニオハシマシケルトキ、タチハキラ五月ハカリニ御書ノ所ニマウテキテ、サケラタウヘケルツイテニ 大春日師範」二荒山本の「こそこのころ」は「御書」の仮名表記。

朱雀院は朱雀天皇。醍醐天皇の皇子。村上天皇の兄宮。延長元年（九二三）七月生。同年十一月皇太子。延長八年即位、天慶九年（九四六）讓位、天曆六年（九五二）八月十五日崩御。退位後は朱雀院に住まったので朱雀院という。「春宮」におはしましける時」は二荒山本には「東宮にて」とあって、皇太子であらせられた時の意であるが、他の多くの本では底本のごとくである。その形では、皇太子（春宮）であらせられた時と解し得るのとはよりだが、春宮は建物としてのそれを言い、春宮に居られた時とも解し得る。そこで、皇太子（朱雀天皇）の東宮時代の居所を見るに、角田文衛「太皇太后藤原穩子」（『角田文衛著作集6』所収）によれば、十一月に皇太子に立った寛明親王（朱雀天皇）は、詔により母中宮穩子とともに弘徽殿に居り、中宮穩子の懷妊出産のため延長三年冬から四年七月まで桂芳坊に移っていたが、その後はまた弘徽殿に暮らした。建物としての東宮（雅院）に居たことはない。したがって、「春宮におはしましける時」は、場所ではなくて、時期をいう。

帯刀は東宮侍衛の武官。帯刀舎人。定員は三十人。『職原抄』によれば、源平の重代の武士が多く補せられたという。『古今集』には「東宮の帯刀の陣にて桜の花の散るをよめる」と詞書のある藤原好風の歌、帯刀を解任された愁いを訴えた宮道潔興の歌があるし、源重之・源兼澄などの著名な歌人も東宮帯刀を歴任している。帯刀の陣での歌合も、はやく延喜年間に保明親王の時（歌合大成三一番）に催され、正暦四年（九九三、歌合大成九七番）にも催されている。武官の集団ながら、この詞書に描かれているような雰囲気は十分に満ちていたのである。

御書所は式乾門の東腋に在り、書籍の管理・書写を行なう役所。よく似た名称の所として、内御書所、一本御書所があるが、それぞれ別のものである。そのこと工藤「内御書所の文人」（『平安朝律令社会の文学』

ぺりかん杜）を参照されたい。この御書所はかつて紀貫之が預（管理責任者）として勤務した所でもある。大春日師範の経歴は不明だが、『勅撰作者部類』によれば御書所預を勤めている。他にこれを傍証する資料はないが、むしろこの詞書を傍証資料となしうるかもしれない。

どのような繋りがあつて帯刀達が御書所に行き一緒に酒を飲むことになったのかは明らかでないが、職場ぐるみの交流があつて、それが詠歌の場となっていることは興味深いことである。ここでは帯刀の全員が出掛けていったとも思えないが、「さみだれに春の宮人来る時は」と言っているから、二三人というのではなく、もうすこし多く十人をくだらない数であろうか。職場ぐるみの文学的交遊についても『平安朝律令社会の文学』に述べているので、併せて参照していただきたいと思う。

歌は、東宮帯刀を「春の宮人」といい、季節の春にとりなしたところが眼目である。皇太子の居所を東宮ということとは『令義解』東宮職員令に見え、『令集解』の「穴記」によれば、御所の東に在るので東宮と言うという。それを春宮とも書くことは、同じく「伴記」に「四時の気は東より発す。即ち春は此に准ふ。故に東宮を春宮と為す。其の義、別無き也」という。五行説により東が春だから、東宮は春宮なのである。和歌においては、これを訓読みして「はるのみや」という。中宮を唐名で長秋宮といい、和歌ではこれを「あきのみや」というのと対をなす。春の宮・春の宮人の例。

霞たつ山辺を君によそへつつ春の宮人なはや頼まん

（貫之集七八一、東宮かくれ給へる頃よめる）

鳴く雁は来るか帰るかおぼつかな春の宮にて秋の夜なれば

（頼基集三、秋の夜、召ありて東宮に参りて、雁の鳴くを）

うらやまし春の宮人うちむれておのがもとや花を見るらん

(後拾遺集一一一良暹法師、後冷泉院東宮と申しける  
とき、上のをのこども花見んとて、雲林院にまかりけ  
るに、よみてつかはしける)

など。頼基集の例は、現在の季節と「春の宮」とのずれを技巧の眼目と  
している点で、一六六の技巧と類似している。

「さみだれに」は、いまが五月だからで、必ずしも五月雨が降ってい  
ることを前提とはしないであろう。「五月雨」に「さ乱れ」を掛けるこ  
とは一六三と同じ。「さ乱れに」の筋としては素直に「来る」に係ると  
見れば、乱れ来るのであるから、前述のごとく人数の多さをいうかと解  
される。しかしながら、この歌が詞書にあるように、酒を飲んだ(「た  
うぶ」は飲むの謙譲語。いただく)後での詠作だとすると、帯刀達が  
酒に乱れているさまを表現しているとも解しえよう。語順はやや整わな  
いが、掛詞としての制約を考慮すれば、そして現実には座が酒に乱れてい  
るとすれば、当座の人々にはそのように理解されるはずである。(片桐  
『新古典大系』は「このように酒に乱れよう」と訳しているのは、乱  
れるために来ると解しているのであろう。)

第五句「うぐひすにせん」の「す」は理解しにくい言い方で、『抄』  
は「春といふ詞に付て、時鳥を鶯に用ひてきかんかと也」といい、『新  
抄』も「春といふ詞によりて、郭公を鶯にしてや聞んとなり」という。  
聞く主体は春の宮人と解しているごとくである。木船『全釈』は下句を  
「春の名にふさわしく、ほととぎすをうぐいすにして、その美しい鳴き  
声を、お聞かせしましょうか」と訳し、「せむ」の主体を大春日師範と  
解している。片桐『新古典大系』は「ほととぎすを鶯に換えたい気持が  
いたします」と現代語訳している。やはり主体は大春日師範である。

問題点のひとつは、ホトトギスを鶯にすると具体的なはどういう事

か。またひとつは、「せむ」の主体は春の宮人か、大春日師範か、であ  
る。第一点については、『抄』『新抄』『全釈』ともに説明が曖昧である。  
『抄』『新抄』は、ホトトギスの声を鶯の声と思って聞くの意とも読め  
そうだが、『全釈』『新古典大系』は明らかに、鳥自体を取り換えると解  
している。第二点はこれと関連して、鳥自体を換えると解すれば、その  
主体は接待する側である大春日師範となる。ホトトギスの鳴声を鶯の鳴  
声と聞きなすと解すれば、その主体は宮人となるであろう。

実際にはホトトギスを鶯に取り換えたりはできないのだから、いくら  
おおげさにユーモラスに表現したとはいっても、ユーモアが空回りする  
ように感じられる。仮に、「せむ」の主体を大春日師範と考える場合に  
は、「春の宮の人々が来る時には、ここは春の宮となるのだから、五月  
雨の中のホトトギスを春の鶯とすることにしようか(ホトトギスの鳴声  
を鶯の鳴声と言う「聞く」ことにしようか)」と、春宮の名に迎えて歓  
迎の意を表したと解しておくのが穏やかであろう。

「せむ」の主体を春の宮人と考えた場合には、「春の宮人の居る所は  
いつも春だから、ここも春だと思つて、春の宮の人々は五月雨の中のホ  
トトギスを春の鶯と言うだろうか(ホトトギスの鳴声を鶯の鳴声と思つ  
て聞くだろうか)」というほどの意となるであろう。『抄』や『新抄』は、  
説明が曖昧で意味が明確に把握しにくいのが、このように解しているかと  
思う。「さみだれに」に酒席での乱れのイメージがあるとなれば、東宮  
の帯刀達が酔いのために誤解するかもしれないと、ユーモラスにからかつ  
たと解するのが場の状況にふさわしいと思うので、口語訳はそうように  
した。